

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(三大石油会社の業績比較 <http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/ExxonShellBp.html>)

(石油:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/oil.html>)

マイライブラリー:0256

(注)本稿は 2013 年 3 月 2 日と 5 日の 2 回にわたり「内外の石油情報を読み解く」に掲載したレポートをまとめたものです。

2013.3.9

前田 高行

三大国際石油企業 2012 年度業績速報シリーズ:ExxonMobil

ExxonMobil、Shell 及び BP は三大国際石油会社(International Oil Company, IOC)或いはスーパー・メジャーと呼ばれているが、これら三社の昨年度の業績が相次いでホームページに公表された。

本稿では三社の公表資料の中から 2012 年度の売上高、利益、石油及び天然ガスの生産量並びに設備投資額を取り上げて分析するとともに、過去 5 年間(2008~2012 年)の各社の業績の推移を見ることとする。そしてシリーズの最後に三社を横並び比較し、その優劣を検討して見る。

最初に取り上げるのは ExxonMobil 社である。(詳細は下記同社 HP を参照)

<http://news.exxonmobil.com/press-release/exxon-mobil-corporation-announces-estimated-fourth-quarter-2012-results>

(生産量、売上が減少しても利益は前年度を上回った ExxonMobil)

1. 2012 年の売上・利益・投資及び生産量

(1)売上高

ExxonMobil の 2012 年 1-12 月の売上高は 482,295 百万ドルであり、前年度の売上 486,429 百万ドルに比べ 0.8%の減収となった。後述の如く同社の原油と天然ガスの合計生産量も前年比で減少(-6%)している。平均価格が高めに推移したため大幅な生産減にも関わらず売上が微減で済んだと言えよう。

(2)利益(図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/2-D-4-93aExxon.pdf> 参照)

利益は 44,880 百万ドルであった。これは前年度(41,060 百万ドル)に比べ 9.3%のアップであり、売上高の減少(-0.8%、上記)と対照的な結果となった。この利益額は日本円で約 4 兆円であり国際石油企業の強靱さを見せつけたと言えよう。

利益の内訳を上流部門(原油生産)と下流部門(石油精製販売)に分け、さらにそれぞれを米国内と米国外に分けて比較すると、まず最も利益が多かったのは米国外の上流部門であり、全体の利益の 58%の 25,970 百万ドルを稼ぎ出している。米国内の上流部門の利益額は 3,925 百万ドル(同 9%であり、両者を足し合わせると ExxonMobil 社の利益の 3 分の 2 が上流部門によるものであることがわかる。

これに対して下流部門は米国外で 9,615 百万ドル、米国内では 3,575 百万ドルの利益を計上しており利益の 3 割弱を占めている。上記の上流部門の利益と比較すると、ExxonMobil 社は利益の大半を上流部門、特に米国外の上流部門に依存していると言える。但し前年の部門別利益と比較した場合、下流部門の健闘が目立っている。即ち 2011 年は下流部門の全社利益に占める割合が 11%に過ぎなかったのに比べ 2012 年は 29%を占めており、特に米国外の下流部門の利益は前年比 4.4 倍と大幅に増加し、海外における石油製品の採算性が顕著に向上している。

(3)設備及び探鉱投資

2012 年度の投資総額は 39,799 百万ドルであり、同社は利益とほぼ同じ程度の投資を行っている。投資を上流部門、下流部門、化学部門およびその他に分けると、上流部門には全体の 90%を占める 36,084 百万ドルが配分されている。利益に占める上流部門の比率は 67%であり(上述)、これを上回る比率で上流部門に投資していることになる。同社は事業の軸足を上流部門においていると言えよう。

(4)石油・天然ガスの生産量

2012 年の石油と天然ガスの生産量は石油が一日当たり平均 219 万バレル(以下 B/D)であり、天然ガスは日産 123 億立方フィート(以下 cfd)である。これを 2011 年の各国の生産量(BP エネルギー統計による)と比較すると、石油の生産量はブラジルに匹敵する生産量であり、天然ガスはカタールと中国の中間程度に匹敵する¹。天然ガスを石油に換算し石油と合計した場合、ExxonMobil の生産量は 424 万 B/D となるが、この生産量は世界第 7 位のカタールと肩を並べる規模である。

石油生産量を地域別にみると、最も多いのはアジア・大洋州の 82 万 B/D であり、続いてアフリカ 49 万 B/D、米国 42 万 B/D である。また天然ガスについてはアジア・大洋州が最も多く(49 億 cfd)、次いで米国(38 億 cfd)である。特に米国における天然ガスの生産量は近年大幅に増加している。米国では現在シェール・ガスの開発がブームを呼んでおり、ExxonMobil も Marcellus 社の買収など積極的な投資を行って米国での天然ガス生産に力を入れている。

2. 2008～2012 年の業績推移

(図 <http://members3.jcom.home.ne.jp/maeda1/2-D-4-93bExxon.pdf> 参照)

2008 年から 2012 年までの過去 5 年間の売上、利益、設備投資及び生産量は以下の通りであった。

(1) 売上高

2008 年に 4,774 億ドルであった ExxonMobil の売上は 2009 年には 3,106 億ドルに急減したが、その後は再び上昇に転じ 2011 年には過去最高の 4,864 億ドルに達し 2012 年もほぼ横ばいの 4,823 億ドルであった。

この5年間の売上の増減は石油価格の急騰及び急落が主な理由であり、生産量の増減とはほぼ無関係と言える。すなわち下記(4)の生産量の推移でも述べるとおり 2008 年から 2009 年にかけては生産量が横這いであるにもかかわらず売上高が急減しているが、これは 2008 年央に原油価格が史上最高の 147 ドルに達し同年の年間平均価格も 97 ドル(Brent 原油)だったのに対して、2009 年

はその反動で原油価格が暴落(同年間平均価格 62ドル)したためである。

そして 2010 年及び 2011 年と 2 年連続して価格が上昇したことにより、売上高は 2008 年の水準に戻ったのである。2012 年は前年比で生産量が落ちたにもかかわらず、価格が堅調に推移したため売上高は 2011 年の水準を維持した。

(2) 利益

各年の利益額は 2008 年 452 億ドル、2009 年 193 億ドル、2010 年 305 億ドル、2011 年 411 億ドル、2012 年 449 億ドルであった。2009 年に一旦落ち込んだ利益はその後順調に増え続け、2012 年は 5 年前の水準に戻っている。売上高と利益の対前年比増減を比較すると 2009 年の売り上げは対前年比 34.9%の減少であったが、利益はそれ以上の 57.4%減となっている。これに対して 2011 年には売上高が対前年比 26.9%増加したのに比べ利益は 34.8%増となっている。売上が減少した場合は利益がそれ以上の割合で減少し、逆に売上が増加した場合、利益はそれ以上に伸びている。価格変動に対するセンシティブリティ(感度)は利益の方が売上よりも敏感であると言える。

2012 年の対前年比の増減は売上マイナス 0.5%、利益プラス 9.3%、生産量マイナス 5.9%となっており、生産量の大幅な落ち込みに対して売上は微減にとどまり、利益はむしろ大幅に増加している。利益の増加は下流部門が好調であったことが主な要因である(上記 1(2)参照)。ExxonMobil 社は原油価格や生産量に左右されない強靱な体質に変化しつつあるように見受けられる。

(3) 設備・探鉱投資額

設備・探鉱の投資額は売上或いは利益のぶれとは関係なく毎年増加の傾向にある。即ち 2008 年 261 億ドル、2009 年 271 億ドル、2010 年 322 億ドル、2011 年 368 億ドル、2012 年 398 億ドルの投資が行われている。

5 年間を通じて投資の 9 割前後は上流部門の探鉱開発投資であり、2012 年は上流部門 90%、下流部門 6%、化学部門 4%であった。石油及び天然ガスは再生不可能な資源で既存油田(或いはガス田)の生産に伴い残存埋蔵量が漸減する宿命を負っている。従って企業としては新規鉱区の獲得とその探鉱開発、既存油田の回収率向上、或いは同業他社の買収などにより常に自社の資源量を維持し続けなければならない。新規鉱区の探鉱開発はリスクも高く、投資のリードタイム(回収期間)が長いため、長期的視野に立った投資が必要である。ExxonMobil の投資が毎年増加しているのはこのような理由のためと考えられるが、見方を変えれば同社はそれが可能な強い財務体質の企業であると言える。

(4) 生産量

石油及び天然ガスを合計した生産量は 2008 年 392 万 B/D、2009 年 393 万 B/D といずれも 4 百万 B/D の大台を割っている。しかし 2010 年以降 2012 年までの 3 年間は 445 万 B/D、451 万 B/D、2012 年 424 万 B/D と 4 百万台を維持している。

石油と天然ガスそれぞれについて見ると、2008 年から 2012 年までの過去 5 年間の石油生産量は 241 万 B/D → 239 万 B/D → 242 万 B/D → 231 万 B/D → 219 万 B/D であり、2010 年以降急激に減少している。

一方天然ガスは 2008 年の生産量 91 億立法フィート/日(石油換算 152 万 B/D)が翌 2009 年は 93 億立法フィート/日(同 155 万 B/D)となり、2010 年には一挙に 121 億立法フィート/日(同 203 万

B/D)に増加、その後も 2011 年 132 億立法フィート/日(同 219 万 B/D)、2012 年 123 億立法フィート/日(同 205 万 B/D)と石油換算で 2 百万 B/D 台を維持している。ExxonMobil は石油の落ち込みを天然ガスで補っていると言える。これは米国内のシェール・ガス権益取得などの M&A 戦略の成果が現れたものであろう。

(ExxonMobil 編 完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

¹ 拙稿「BP エネルギー統計 2012 年版 石油篇」参照
<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/0187BpOil2011.pdf>